7．9 青松葉事件 と 渡辺鉞次郎正陰

「八幡の語り草」第 46 話（33 頁）

わが国の最後の斬首事件は、尾張藩の青松葉事件である。その真相は、「尾張藩の家老たちの勢力争い」とか、「佐幕派と勤王派の争い」など、いくつかの説があるがはっきりとしていない。

青松葉事件が発生したのは、慶応４年（1868）であった。まず佐幕派の首領格と言われた渡辺新左工門、榊原勘解由、石川内蔵允の三人は、その日の午後、朝命により死を賜うと、尾張藩徳川家御付家老、犬山城主の成瀬隼人正正肥から上意の宣告があった。

斬首される筆頭の渡辺新左工門の介錯役は渡辺鉞次郎が指名されたが、同族であることから、鍼次郎は変更を申し出で、榊原勘解由の介錯役となった。しかし、その介錯ぶりは、勘解由の父である蓬庵（当時 90 才）が、その子の遺骸を見て激怒した程無様であったという。なお、勘解由の妻はんは、亡き夫の初七日に、長男繁次郎（21 才）、次男亀三郎（17 才）とともに自害して夫の後を追った。

渡辺鉞次郎は、後に愛知第七区長をつとめた。その役を終えた後、八幡村の荒古に住んだ。